

それでもこの自然の破壊も今のようににはさわがれず、まわりにはまだまだ緑がたくさんに残っていた。二階の私たちの部屋からは瀬戸の海をほとんど淡路島が眺望できた。瀬戸の海は一日に三回くらい水の色が変わって美しかった。夜になれば淡路島の町の灯がきれいであった。神戸の町の夜の景色は百万ドルといわれたものだった。

しかし、その頃でも瀬戸の海はある意味では海の銀座であった。朝も昼も夜も行きかう船の数はおびただしかった。小船もあれば汽船もある。それでも海はまだまだ美しいといえた。そして美味しい魚もたくさんとれた。この舞子のとなりの明石の漁師町まで出かけていくと魚のあふれた魚棚(市場)があった。町の両側に魚や干物、それに山のもの、つまり海の幸も山の幸もところせましと並べられていた。樽のなかには鰯(タイ)や鰈(カレイ)や比目魚(ヒラメ)がピチピチとはね、道の上では鰯(タコ)が楽しげにあつちこつちをはいまわっていた。

しかし、私たちが去ったあと、舞子の山はつぎつぎとけずられて緑はへり、瀬戸の海は赤潮やヘドロにおかされて、明石の魚棚もすっかりさびれてしまったという。そして舞子の東隣りの須磨の海水浴場でも身体に真黒い重油がまつわりつくといふにいたっては、自然破壊もゆきつくところまで来たといふ感がある。

私たちは三年半ほどで舞子から神奈川県の平塚へ移った。住んだのは工業団地の一角であった。移った頃は建設予定地が多く、淋しいくらいだったが、まもなく、あれよあれよというまに工場がギッシリと立ちならび、工場の騒音に悩まされた。近くを流れる馬入川も汚れて魚がとれなくなった。やっと釣った魚も油くさくて食べられなかった。

五年ほどたつて、私たちは横浜の磯子に移った。ここで私たちの住んだのは遠道山という山をけずって新しく出来た団地であった。ここは戦時中は陸軍の演習地であったが、戦後はピクニックなどでにぎわり庶民の憩いの場であった。海側は住宅地であるが、北側にはまだまだ緑の山々が残っていた。二階から海が眺められたのは、さきの舞子とおなじであったが、海はほとんど埋めたてられ、大企業の工場が建って、海はほんのちよつびりとしかみえなかった。ここも昔は貝や蟹とり人が集った海だったという。

新しい団地であるので、最初は夜になると鼻をつままれてもわからぬような暗さであったから、自分たちの手で町づくりを考えて、街灯をつけ、子供たちの通学のパスを増設させたり、保育園をつくるなどの運動をした。そのうち、北側の緑の山々も団地化のために、つぎつぎ